

劍門の道中にて微雨に遇う

陸

游

衣上の征塵酒痕も雑う

遠遊処として消魂せざるは無し

此の身合是れ詩人なるべきや未や細雨驢騎を劍門に入る

【作者】陸游(一一二五〜一二〇九年)・南宋の詩人。越州山陰(浙江省紹興市)の人。字は務観(むかん)。号は放翁(ほうおう)。子供の時から父祖

以来の愛国的抗戦思想を植え付けられ、金に対する徹底抗戦を叫び、憂国の詩人と呼ばれた。南宋は金に屈辱的な平和を得て(陸游十七歳、死ぬ時まで領土の回復を切望していたが死後元に滅ぼされる。范成大、楊万里とともに南宋三大詩人の一人、作品数はおよそ一万首、空前の多作家。酒を酌んでは怒濤の如く詩を吐きだしたとある(王魚洋「陸放翁の心太平菴硯の歌」)。

【語釈】* 劍門…: 劍門関。山の名。 * 道中…: 旅路で。 * 衣上…: 着物の上の。 * 征塵…: 旅路で付くよこれ * 雑酒…: いろいろな材料が混ざった下級の酒。 * 消魂…: うっとりすること。落胆すること。魂を奪われること。 * 細雨…: しとしとと降る雨。

【通釈】『転勤で劍門を通過している時、微雨に出逢う』・衣服の上には、旅塵と旅路で飲んだ安物の酒をこぼしたシミのあとがある。遠くまでのこの旅路では、魂を奪われることのない処は無く、この身はまさに詩人と言うべき境地に達しているか、どうか。しとしとと降る雨の中、(古の詩人のように)驢馬に乗って劍門の山道に入っていく。